

渚から来るもの 開高健

渚から
来るもの

開高健

角川書店



渚から来るもの

昭和五十五年二月十日 初版発行

著者 開 高 健

発行者 角 川 春 樹

発行所 株式会社 角 川 書店

東京都千代田区富士見二の十三
〒103 振替 東京三一九五二〇八
電話 東京(三六五)七二二(大代表)

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社 宮 田 製 本 所

落丁・乱丁本はお取替えいたします

©1980 Takeshi Kaiko. Printed in Japan

0093-872267-0946(0) ￥1,400

目次

第一章	魔法の魚の水	五
第二章	チャン	四六
第三章	蝶と宮殿と娘	一〇四
第四章	輝ける闇	一六二
第五章	アーサー王宮廷のコネチカット・ヤンキー	二二
第六章	死産の革命	二六〇
第七章	輪舞	三七
終章		三五八

装帧·岡村元夫

渚から来るもの

第一章 魔法の魚の水

1

どこかで音楽が鳴っている。

眼をさますと汗にまみれて寒冷紗かんれいしやの蚊帳のなかにころがっていた。ゴザ一枚の床几しょうぎに寝たので背が痛かった。

鎧窓から小川のような日光が流れこんで、傷だらけの床に射している。くたびれきった蚊帳にもキラキラと斑点が踊っている。時計を見ると八時である。夜が明けて一時間にしかない。

まだ日光は未熟で濁っていない。けれど熱の兆はもうでている。湿りがそれだ。透明な日光のなかにも湿りにじみ、澱みがある。蚊帳、藁枕、ゴザ、私の肌、すべての物がじっとり汗ばんで濡れている。粥に浸したようである。床におちたバストの赤い袋をひろって一本ぬき

だし、火をつける。ゴォロワーズに似た辛口の黒タバコは舌に苦く流れた。濃褐色のその香りも湿っていた。

鎧窓をひらくとすぐそこが道路で市場だった。晴れた朝空のどこかで音楽が鳴りひびき、はだしの貧しい女たちがいつせいに商売をやめて竹籠のわきに起立している。タバコ売りの女も椅子からおりて佇んでいる。一本買いの客のために木箱のふちにたてた長い線香がゆらゆらと煙をあげている。誰も口をきかない。朝礼である。鳴っているのは国歌である。毎朝どの町でも拡声器から国歌が市場の群衆のうえに流れ、人びとは二分か三分たちあがって黙禱するのである。官庁と兵営では国旗が柱に掲げられるのを敬礼で見送っているはずである。ここ十日ほど、毎朝私は国歌で眼をさましてきた。尊敬ではない。反射である。何の保証もないがこの時刻のバスがいちばん安全だと私は思いこんでいるのである。

歌がおわると女たちはスイッチを入れられた人形のようにはじけ、いっせいに甲ン高い声をあげて商売にとりかかる。どの国の市場ともおなじ活力にみちた喧噪が起る。女たちは竹籠や洗面器のまわりに群がっていきいきと騒ぎあう。値切り、罵り、笑い、賞讃する。葉タバコを噛む女が口をひらくと真紅の唾が道に走り、血が笑うようである。ババイヤ。バナナ。赤大根。どくだみ。乾魚。蜜柑。バナナの葉に包んだ肉のチマキ。パイナップルは鋭い棘を生やした鎧に夜をふくんでひきしまり、鮮烈な芳香は濡れるばかりである。道の分泌する魚の濃い腐臭には貧困があるが果実たちはあざやかに豊饒である。洗面器のなかではライギョやナマズが泡まみれになって跳ねまわっている。眼に川底の泥の冷たい闇が輝いている。

「……………！」

「……………？」

「……………！」

「……………？」

豚肉を買った女は肉を藁で縛り、指にひっかけてゆうゆうと歩いてゆく。一つの籠に子供を入れ、もう一つの

籠に山盛りのウドンを入れ、天秤棒にひっかけて器用に調子をとつつ人ごみを縫っていく女もある。魚売りの女は洗面器から巨大なライギョをつかみあげる。いきなり棍棒で頭を二、三回なぐりつけてから庖刀でひらきにかかる。道ばたの石が^{またいた}組となる。ぬいた腸は道に捨てたままである。亜熱帯特有の豊熟した熱と腐臭があたりにみなぎり、うごく。

テーブルと床几だけしかない、植民地風の、天井が高くてがらんだ部の屋のなかを歩きまわって私は万年筆やノートやシャツを帆布製のバッグにつめこむ。膠^{にかわ}のような宿酔が全身にたちこめ、血に濃い霧がかかっている。舌が腹れあがって毛虫のようだ。手や足に青い熱がこもって、もの憂く重い。酒精がまだちろちろと燃えくすぶっている。息をつくとヘヤートニックの匂いが洩れた。ブランドイーを飲んだはずなのにライラックの匂いがするのだ。

昨夜町を散歩していると中国人の酒屋があつて、チャアシユウメン屋の屋台のアセチレンの灯では『順利酒舗』と看板が読めた。岬の果てのこの町にはフランスの田舎町にそっくりの円型広場はあつたが電気がなかった。

店のなかに入ってみると酒屋にはロウソクが一本ともっているきりで、洞穴のように暗かった。酒瓶や漢方薬やキャンディーのガラス壺などがごたごたと積みかさねられ、魚の腐臭が暗がりたちこめて眼もくらむばかりだった。私はブランドイーが飲みたかったから、店の入口にたつておぼつかなく、「……白蘭地……白蘭地酒……」といった。すると不潔な臙臙のなかからお化けのようなものがひそひそした足どりでできて、瓶を一本わたしにくれたのである。

『栄華大旅店』の二階のまっ暗な部屋にもどり、手さぐりで椅子に腰をおろして待っていると、バジャマを着た中国人の若者が豆ランプを持ってきてくれた。私は豆ランプをテーブルの窓ぎわにおき、いそいそと飲みにかかった。酒はけばけばしく未熟で、不可解な花油の匂い私たちのぼり、舌にころがすとヤスリをかけられたみたいだった。咽喉を削りつつ滴は胃におちていき、火傷が血管いっぱいひろがった。やがて脳の皮に音たててしみこみ、とつぜん槌でなぐりつけるような衝撃があった。ランプの灯でしらべると、ラベルの金泥刷りのぶどう蔓、瓶底を凹ませたぐあい、紺色の鉛箔の封、何から何まで

一ミリの狂いもなくヘネシー家の作品であった。ただ、銘だけが、堂々と、『ヘネック』となっていた。ラベルのすみには蚤のような字で『西アゴネシア メイトー デュバルク街 南洋商会』とあった。この国の二十家族の筆頭にかぞえられる華僑の豪商である。靴墨から銀行まで、何でも手をだす。

(……コムバニイ・ナンヤン……コムバニイ・ナンヤン……)

黄金色に輝くラベルを見ながら私は愉快になって飲みつづけた。豆ランプの灯かげにノートをひろげ、ときどきライラックの匂いのするおくびを洩らしながら、日記をつけた。何匹ものヤモリがあらわれ、しきりに賢い眼を睜^{みは}って蚊を食べたり、鬼ごっこをしたりした。私がベンをおき、息をひそめて石の真似をすると、彼らのうちの大胆な若者はノートのうえにやってきてたちどまり、しげしげと私の顔を覗きこんだ。ノートのまんなかに佇み、万年筆に片手をそっとおいて、そうするのである。ずっと夜は静かだった。今夜にかぎってどうしたことだろうと思ひながら汗をふきふき私はペンを走らせた。一時すぎになって、とつぜん一日が完成した。町はずれ

で大砲が咆えたしたのである。私は満足をおぼえた。東京の杉並区にある私のアパートでは毎夜十時になると銀行の鐘が『帰郷』の一節を奏でる。それは夕刊の娯楽ページ、ハッピー・エンドのTVドラマ、組立本棚の世界文学全集、トマト・ケチャップをかけたオムレツに共鳴する。けれど、八時間ずれたここでは砲声が夜のひらいたことを知らせ、人びとを床几や蚊帳へいさせるのだ。そういうことになっているのだ。

ペンをおき、耳を澄ませる。町は寝静まったきりで誰ひとり起きだすものはなかったが、しきりに窓と壁がふるえた。毎夜のことなのでおぼえてしまったが、あの遠く長く夜空をひっぱたいて走るぐあいは一五ミリ無反動砲だ。つづいて機関銃の乾いた連射音がひびきはじめた。大砲はしばしば盲目的な威嚇にすぎないけれど、これは接触のきざしである。酔ってくらくらする耳に銃音は冷酷な激情や暗夜の広大さを感じさせた。この町はずれから海岸にかけ、何キロにもわたってマングローブの茂る沼沢地がひろがっているのである。機関銃のはためきのなかで正確に無反動砲弾の炸裂音が遠い南西の方向に起った。一発ごとに聞えるのは瞬発信管でも使ってい

るのだろうか。あれは木の枝にふれただけでも炸裂すると聞いている。十分たつて機関銃ははためくのをやめた。銃口のうごく気配はなかった。応射する音もなかった。

戦闘はなかったのだ。雲のうごきを茂みにひそんだ人影のうごきと思いこんで神経の疲れた哨兵が反射的に引金をひいただけのことかも知れなかった。しばらくして砲声もやんだ。ふたたび沼は静かになり、海からの上潮にのって小さな田舎町を泥水がひそひそと犯しはじめた。

帆布のバッグを肩にかけて暗い階段をおりてゆくと、昨夜の若者がいた。ドアのかげに椅子を持ちだし、のんびりくつろいで市場のざわめきと日光を眺めていた。タイル張りの床に茶のコップがおいてある。私を見ると微笑して手をのばし、うけとった部屋の鍵を壁の釘にかけ、いんぎんなフランス語で話しかけてきた。

「もうおたちですか？」

「うん」

「メイトーへゆくのですね？」

「うん」

「顔が蒼いですね」

「ヘネックを飲みすぎたよ」

「あれはとてもいい酒だと聞きますよ」

「南洋製が？」

「ええ。みんないいいってます」

道にでると、いきなり頭から湯を浴びせられたようだった。はげしい日光で眼がくらんだ。これで汗をかけば宿酔が治るかも知れない。洗面器や竹籠をよけながら市場の人ごみをぬけ、私は黄いろい化粧漆喰の壁や鎧窓にとりかこまれた田型広場をよこぎって町はずれのバスの発着所へいった。

すりきれたように町はとつぜんそこで草のなかに消え、おんぼろのバスが一台、板小屋のまえにとまっていた。見わたすかぎり灰いろの泥をたたえた沼が日光を浴びて地平線のかなたまでひろがっている。ところどころ背を丸めてうずくまるようにマングロープの茂みがあり、地平線に二つ、三つの村が浮いている。いちめんの泥のなかでは村は地平線にひっかかった離れ島か難破船のように見えた。日光、雲、泥の輝き、あたりに広大な展開が感じられる。かなたに南支那海があるはずだ。巨大なイセエビが薄明の泥のなかを岩から岩へゆつくりと移動している。香港のアバディーンの料理屋の生簀で目撃した

のとおなじ奴なら、そうだ。きつとそうだ。その影は巨大な花の群れにそっくりなのだ。

農民や小商人が身分証明書を見せて板小屋で切符を買っている。政府発行の記者証とバスポートを見せて私はメイトーまでの通し切符を買った。カウ・ボーイ帽にそっくりの汗まみれの広縁のジャングル帽をあみだにひっかけた若者が複写式の粗末な帳簿に私の姓名、バスポート番号、目的地などを書きこんでから切符をくれた。複写された乗客名簿は一通ずつ国道沿いの町の検問所へバスがとまるたびにわたされる。乗客はひとりのこらずおろされ、憲兵が点検に来る。東部でも、西部でも、どこでもそうだった。憲兵は座席のしたをしらべ、屋根にのぼって荷物を覗き、乗客の荷物を手でさぐる。愛国戦線のゲリラがまぎれこんで爆発物を持ってはいはいとしらべるのだが、本気になってる様子は見られないようだ。憲兵のなかには自動小銃の安全装置をはずしてから荷物をひとつひとつ徹底的にしらべるものもないではないが、たいていはおざなりのように見える。日光に喘ぐ憲兵の眼は倦んでいるようである。メイトーでも深夜

にしばしば憲兵が懷中電灯を持って家から家へ臨検にまわることがあるが、めいわくがりこそすれ、誰も効果を信じているものはないように思える。

「……ジャボネ？」

鉛筆を走らせつつ若者がふと顔をあげる。

「ジャボネ？」

「そうだよ」

「リップバ、リップバ」

「どこで日本語を習ったの？」

「……………」

若者は愉快そうに首をふり、帳簿にかがみこむ。口をとがらしていっしんに筆写にふける。旧日本帝国陸軍の影がここにも去りがてにたゆたっている。

沼のなかに運河がある。農民が小舟に稲の束やバナナを積んでゆく。竹棹で押すものもあり、小型船外モーターを鳴らしていくものもある。いまは乾期で、収穫期なのだ。山積みの稲束でいまにも沈みそうになりながら泥水をかきわけかきわけしている舟もある。ときどき機帆船や荷足舟（かりあしふね）もゆるやかな波をたててあらわれては、消える。どの船も舳（しほ）に赤、黒、緑のペンキで守護神の目玉を

描きこんでいる。目玉は舳（しほ）の右と左に一箇ずつ描いてある。ディズニー漫画の陽気な怪魚が陽を浴びつつ沼を泳いでいるように見えるが、このあたりの海賊、水賊は、このおどけた汚点（しほ）のために死ぬことを何とも思っていない。

米や生ゴムや阿片の荷をめぐって彼らはアメリカ製、スウェーデン製、最新式の携帯機関銃で戦闘するが、目玉に穴をあけられないように舳（しほ）に素手でぶらさがることがある。体を楯にするのである。頭目が命令するからというよりは自分からすすんでやるのだという噂である。どれほど果敢、擻猛な水賊も目玉に穴をあけられるとたちまち戦意を失ってしまう。そのかわり冒瀆に対する後日の報復は腺病質な子供のように執拗、陰惨をきわめたものとなる。バズーカを持つ水賊もいるから舳（しほ）を狙えば一瞬で勝敗は決するはずであるが、けっしてそうはしないのである。たがいに聖眼を避けつつ水い時間をかけて船腹を掃射しあうのである。仁義である。侵犯は卑劣だとされている。むしろそうすることでたがいに衰弱することを避けあっているのではあるまいかと私は思う。南支那海一帯の海賊や水賊の昔からの伝統である。つい近

年ゴ・ディン・ディエムに追いつめられて亡びた南ベトナムのビンスエン水賊にもこの習慣があったのではないだろうか。

メイトーの「カクテル・サーキット」ではよくこの時代おくれの水賊が話題になる。ドライ・マーティニのピメント詰オリーブのかわりに人びとは血みどろの話をするのが好きである。「ルトウール」と呼ばれるフランス帰りの知識人、高級官僚、医師、政治家、將軍たちである。彼らは西アゴネシア近代化の最大の障害物として山賊、海賊、水賊の激しくて蒙昧な跳梁ぶりを罵倒する。

口をきわめて罵倒する。けれど民族の忍耐力や自己犠牲の徹底ぶりを賞揚するときにはきつと悪漢たちをひきあいのだすのだ。苦笑、憂鬱、冷嘲まじりではあるけれど誇らしげに額をあげて語りだすのである。けれどこれにはいつも畏がある。議論を少し深めようとすると、きつと、『第七細胞』『第九細胞』の青年決死志願隊の爆死行為を賞揚しなければならなくなるのである。

それは愛国戦線が首都に設けたと推定されるテロリスト・グループで、隊員はたいてい十六歳から二十歳までの少年である。果敢さ、教義への献身、自己無化の徹底

ぶりでは水賊など物の数ではない。水賊は阿片や生ゴムがなければ出動しないが、少年たちは眼に見えないもののためにいつでも爆死する決意をかためている。動機の無私ぶりで自己放棄の行動を賞揚しようとするれば、水賊は舞台袖の幕に消えてしまふしかない。將軍たちはにがにがしげに口をつぐむ。彼らは少年たちを賞めるわけにはいかないのである。彼らの標語は「殺共」^{シヤケン}（アカを殺せ）である。愛国者ぶりを見せるために民族の特性を誇ろうとするとギャングを賞めなければいけない。この奇妙な畏は彼らをいらいらさせる。冷笑の皺^{しわ}を口もとに浮べるものもあつた。

「……テロのことを彼らは「弱者の武器」だといつてます。カミカゼ自殺のことは「聖なる狂気」だといつてますよ。「聖なる狂気」です」

ある夜のパーティーで会った一人の若い大佐が私にそういつたことがある。西ドイツ大使館主催のパーティーの混雑のなかで知りあつた大佐である。フランスとアメリカの士官学校に留学したことがあつて、「サン・シリアンでウェスト・ポインター」、降下部隊大佐、アゴネシア国軍の最優秀幹部将校の一人であるらしいというこ

とのほか私は彼について何も知らなかった。名前も知らなかった。たまたま銀盆にあったカナベがわりの焼売（シヤウリ）をつまもうとしたら指がふれあつたのである。

シンケンヘーガーとライン産ぶどう酒で紅潮した無数のアジアとヨーロッパの顔のなかを漂いつつ私たちは小声でいんぎんに話しあつた。大佐は冷静、慎重で、ひどく謙虚であつた。私は口を割らせてみたかったので、危険であつたが、テロリストを賞めた。少なくとも少年たちは純潔だという意見を二度ほどつぶやいてみたのである。すると大佐は、セルゲイ大公を暗殺しようとして馬車に子供がいるのを見て思いとどまつたカリヤーエフのことを話した。あのロシア人の詩人はセルゲイ大公を殺し、その場で自分も死ぬ覚悟でいた。それがあの時代のテロリストの哲学であつた。けれど時限装置が發明されてからはこの純潔さは失われた。テロリストは時計に敗れ、墮落した。彼はただ時計の針をセットする死の職人となつてしまつたのだ。熱核戦争のボタン盤の管理人とおなじである。電子計算機を操作する銀行員とおなじである。酒場の天井裏で炸裂するプラスチックはアメリカ兵も、女も、靴磨きの子供も、小鳥売りの老婆もか

まわずに殺してしまふ。テロリストがカミカゼすることもある。けれどしないこともある。『第七細胞』がいつもカミカゼするとはきまつていない。彼らも時計よりは仲間の命を惜しむ。あたりまえではないか。

大佐は柔らかな口調でそういうのだった。

私がひそひそつぶやいた。

「……けれど、このあいだ競技場が爆破されたとき、いつもあのあたりで遊んでいる子供があの日にかぎって一人もいなかったですよ。アメリカ兵は村へ作戦で入っていくとき、子供がいたら安心し、いなかったら警戒しろといつてますよ。きつと『オールド・ジョー』がそのあたりにかくれて狙つてるといふのです」

「正確です。よくござんじです。彼らも原則を持っています。けれど、そういう場合もあれば、そうでない場合もあるのです」

とつぜん大佐の淡褐色の冷静な瞳のなかを激烈に暗いものが走つて、消えた。その閃きにこめられた容赦ないものが私を黙らせた。

ホールは男や女の快活な肉の火と香水の霧で息がつまりそうだった。純白のスペンサーの胸に緑金の略綬を輝

かせた西ドイツ大使は握手と汗のなかで微笑しつつ喘いでいた。華麗な鍛鉄の薔薇窓のドアをおして大佐と私はテラスに出た。芝生の庭に椰子やフェニックスがたち、葉が星の群れを漉^くしていた。邸の塀のそとのどこかで椰子の実の胡弓がひくく呻^ういていた。

「今夜は大丈夫です。部下がよく警備しています。このパーティーのために私は降下部隊を一大隊持ってきたのです」

狙撃を恐れて暗がりにつんでいる私を見て大佐はくすくす笑った。私たちはバストの袋をかわし、火をつけあった。濃密で蒸暑い、蒼白な闇に、煙が消えていくのを見送りながら、大佐は非難でも侮蔑でもない口調で、みんな「聖なる狂気」にとりつかれているのだ。行動を弁解できない人間はどこにもいない。やがてあなたも弁解しはじめるだろう、とつぶやいた。いや、事実だ。事実を見たいのだ。まずそれだけなのだ。私は知りたいのだ。私はそう答えようとした。けれど、口をひらくこうすると、とつぜん大佐の鋭さがわかった。少なくともいまのところは、という英語を私はさがしにかかっていたのである。すでにそれは一種の「弁解」ではあるまいか？

……

2

バイナップルの籠、バナナの束、こわれかけの自転車、古ぼけた手動式ミシン、生きた豚が一头、ガソリンを入れたドラム罐、ごたごたと屋根に積みあげてロープでがらんじがらめに縛ったバスの尻を私たちはおした。運転手が何か叫ぶと乗客の農民や小商人たちはおとなしくバスのうしろへまわり、ずんぐりふくらんだ尻を、「……エーッ……エーッ……」と声をあげておしはじめた。そうしないとエンジンに火がつかないらしいのだ。宿醉をこらえながら私もみんなにまじっておした。バスはひどく重かった。だぶだぶに肥って崩れた体へボロぎれをひっつけた、不可解に傲慢な老婆のようであった。やがて彼女はぶざまな腰をゆすり、しぶしぶ前後にゆれ、のろのろとうごきだした。十メートル、二十メートル、おしていくうちに、とつぜん小さな爆発音が起る。運転手が何か叫んだ。「……いくぞッ……」とでもいったのだろうか。バスは眼をさまして身ぶるいし、乗客たちは

かけだして、てんでんばらばらに胴腹を切りぬいたドアへとびついた。乗りおかれても待つてくれない。私は草むらを走り、血まなこでドアへしがみつく。

このバスの顔龐ぶりもしたたかなものであった。計器という計器はのこらず壊れていた。ハンドルは1/3ほど欠けおち、運転台の床には大きな穴があいて風が吹きこむままだった。手動ブレーキも錆びついてよくきかないらしかった。それが走りだしたとなると気がいじみた速度でとぶのだ。風を切つてとぶのだ。町も国道もかまうことじゃない。ギアを入れかえるということをしないのだ。ギアはゴム・バンドで計器盤へ縛りつけたままなのだ。ただ、もう、ひたすらいちもくさんにとんでいくのである。あらゆる部品が錆びついたり、壊れたり、ぬけおちたりして化石になりかかっているのにエンジンだけは異常な精力にみちていききしているのである。

はだしの少年が一人、屋根にたちはだかり、風のなかで必死に「……ヒョーイ……ヒョーイ……」と叫ぶ。しばらくとびつづけてからバスがとまり、少年はバケツを持って沼にかけつける。もうもうと煙をあげる赤錆びのラジエーターに少年は誇らしく泥水をそそぎこむ。泥水

の湯玉が散る。たらふく水を飲みおわるとふたたびバスは疾走、疾走、疾走。少年は風のなかで叫び、運転手は欠けおちたハンドルにしがみつき、疾走、疾走、疾走。

水田もゴム園も丘もかまうことない。水牛、牛車、ジープ、兵員輸送車、タンク、兵士、スクーター、ラムブレッタ、何がこようとこまうことない。ひたすら、かたくなに、ただ疾走するばかりである。バスだけではない。この甲虫のような『四ツ馬印』（4CV）ルノーのタクシ―も十台のうち九台半までが崩壊瞬間の体なのにエンジンだけは異様な精悍さをみなぎらせてやはり気がいじみた速度でとぶのである。三輪車、スクーター、ラムブレッタ、ジープ、すべてそうである。

メイトーは人口二百万ほどの小さな都だが、火焰樹の並木道は正午前と黄昏^{たそがれ}、一日に二度、あらゆる方角からおしよせる潮で混沌とした活力がみなぎる。消化のわるいガソリンの排気煙が青い濃霧のようにもうもうと道いつばいにたちこめる。そのなかで歩行者は自転車におびやかされる。自転車は三輪車におびやかされる。三輪車はスクーターにおびやかされる。ベスパ・スクーターは『四ツ馬印』ルノーに、ルノーはワーゲンに、ワーゲン